

三河アララギ

平成二十七年

九月号

第六十二卷 第九号



ニューヨーク日記(107) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

Pride March! Rainbows everywhere

Blue Shoe Diaries



二日前に同性婚は合憲と言う判断が出たから今年のパレードは皆んなノリノリだろうと思って見えました! お天気にはあまり恵まれなかったけど逆にちょっと虹が見えそうなお天気だったので良かったかも? 世界中の色んな人達が参加して人間の虹だったね。

This year, the LGBT Pride Parade comes 2 days after the Supreme Court deemed same-sex marriage as constitutional. So, expecting a very festive parade full of people, I joined in the happy! The weather wasn't the best, but in a way, ideal. Great conditions to see rainbows in the sky. Though I didn't get to see any in the sky, I got to see a rainbow of people from all around the world and all walks of life marching in NYC. A very NY moment!

感 銘 歌

御津磯夫第十歌集 「御津磯夫歌集」

玄関の診療時間表を剥がさしむ明日よりつひにわが医院閉ざす

P 190

われははや杖によりても門を出でずただ庭前の夕蟬をきく

P 191

歌集 「スモン」

大須賀寿恵

スカート丈つめて穿きゆく年々に背丈の縮む齡となりぬ

癒えたりといはれし吾のスモン病今日は下半身冷ゆれば痛し

御津川の流れ早きに糸蜻蛉群れてすれすれにさかのぼりゆく

歌集 「草々」

今 泉 米 子

ホテルにて買いたる爪皮下駄にのほりゆく四百余段の補陀洛の山

熊野杉に紅葉交らぬ那智の山時雨るる朝のひとときを居り

さざえの殻二つ包みし袋さげ雨降りやまぬ熊野駅前

ノボタンと書きて示せばうなづきて花びら拾ふそのむらさきを

切り抜きに翻訳そへてラ・ラソン紙の吾が娘の個展の記事を送り来

皿に盛りし柗木の朱実を捨てないでとたのみいひつつ孫かえりゆく

船便は二た月あまりかかるとも三河の味噌の八百グラム

缺^かけたるも曝^あれ亡^なびゆくもあり五輪やさしき墓石のまろぶ

瀧山寺くだらむとして若萌の梢に白き月のかかれる

芝伸びて狭くなりたる庭のみちゆきす吾も野良猫も犬も

遠空に

蒲郡 岡本八千代

鳶一つ朝の遠空に舞ひてをりただに見てをり孫とおもひて

いつしかに自立したるらしわが孫よけふの大空に一つ鳶かな

君の葬りきのふにすぎてくれなるの百日紅の花咲き初めにつつ

マツさんの娘もわれの教へし子老いたるわれをも慕ひくれにき

思ひ出は次から次へと浮かびくるああ中学生らのあの顔この顔

夏休みに女教師われを誘ひくれて君らと囲みし堤防の灯台

横たわりしままにても見ゆるサルスベリ今日の炎天の中のくれなる

わが書屋の小さきカレンダーはやばやと八月にしたりなぜだか知らない

われもつひに二病息災となりにつつ暮れてゆくははや今日の一日も

曾孫の置きておきたるフラフープが今日もあるかな同じ処に

江戸切子

東京 今泉 由利

石神井川神田川と隅田川会ひ合ふところ今日川開き

表面の張力然と整ひてしか大き蓮葉ととのに水玉光る

ここは今十萬億土か不忍の蓮の花葉はなはに埋もれるたりき

電線の二本の線の影にさえ頼りてゆきぬ駅までの道

咲き初むる宵待草としばらくは並び立ちをり半分の月

上り坂下りゆく坂いくつ坂都電にてゆく面影橋へ

新幹線在来線都電をも一望にする飛鳥坂より

太陽も月も銀河も測り終へいよよ宇宙の重さに迫る

自らの集めし物の中にゐてあの日あの時この日このこと

厚き赤深くカットの江戸切子清々として一杯の水

振袖

豊川 弓谷 久子

菩提寺の住職逝かれたり齒切れよき説法未だ耳に残りぬ

水無月は文月となる梅雨の日を一人こもりて古着解きをり

雪柳の四方に伸びし枝を剪る両切鋏の音響かせて

朝刊の平和の俳句をまず読みぬ今朝の投句者我と同年

縁台に蚊取り線香手にうちわ国府の祭りの打ち上げ花火

ゆったりと今夜の花火を楽しまむ我が庭先の暗闇の中

重なりて空に輪を描くとりどりの花昔は無かりしこの豪華さの

くちなしの葉にしっかりと止まりをり未だ新しき蟬の脱け殻

実感の湧かざるままに眺めをり振袖姿のみさとの写真

はや成人かと戸惑ひてをり我が中にみさとは今も幼なくて

朝露

新城 青木玉枝

山里に住みて二年目の夏迎え都会のリズム忘れゆくのか
空を見上げ朝一番に深呼吸空気とうまさ初めて知りぬ
手をかざし青田の続くその先きの山裾迄の細き小径を
夕暮れの夕陽の沈む山並は今日のひと日の終りを告げて
夜のしじま物音一つきこえない耳にせんさし一人の音楽
辛棒と何んべんも書き棒の字をじっとみつめて悔いる日びに
朝露の光る草生をはだしにて歩いてゆけば玉露の心
夏が来て杉林渡る涼風に門の小道にしばしの朝を
老いて今この山里にすぎし日の楽しさばかり夜々のベットに
昨日今日明日へと続く残り道せめて自分の心ゆくまま

勲章

豊川 内藤 志げ

均されし畑一面に生え揃う梅雨の雨露にはこべら美し

わが目には見えざる程の枝に止まり鶉の幼か今し翔び立つ

臆が浮き醜く曲れるわが小指葱を束ねし勲章なりし

沙羅の葉の雫は今だ落ちがたし水戸黄門の終る頃なり

傘をさし棒に作りし穴に播きてゆく金時ササゲは赤き種なり

梅雨の雨北窓に見る本宮山は雲に覆はれ頂きかすか

梅雨寒に迷い出しかキリギリス長き触角地にすりながら

梅雨の晴淡き緑の羽根の色ゆるく歩みてキリギリス行く

台風の風に集る燕つばきらめ早し素早く数多翔び舞う

日盛りに生垣を刈りいる若きらに西瓜を切るよと声高く呼ぶ

汗と草液くさじり

岡崎 林伊佐子

炎天に畑の草取り草刈りぬ作業者に匂ふ汗と草液

照りつける日差しを受けて働けば畑の土に汗の滴る

鍬の柄えも艶尖りする農耕の真夏日のもと真昼日のもと

端境期の蔬菜も高値にうられぬる自家栽培は朝どり収穫

豊作の西瓜を友に配りゆく重し重しと夫の運びぬ

四十年住宅地に住み逝く友も施設に入る友も寂しき

離村して音沙汰たえし村人を懐しく思う寂しく思う

今は亡き師に賜わりし「作歌の友」挫折するとき励みとなりぬ

難聴のわが手に文字かき教示する師の面影は永久に忘れぬ

耳遠き寂しささえも語らずに堪えて笑顔のわが世は過ぎむ

短歌ありて

豊川 安藤 和代

夕づけば急ぎ草刈る道辺に宵待草はゆるり咲き初む

若くして母を亡くせし吾なれば白寿の母いる友をうらやむ

揚雲雀鳴けよなけなけ私も負けじと庭の太き草抜く

嫁がせる娘を送る心地して夫の愛車を手ばなす吉日

喜びも又悲しみも歌あれば自と心は鎮まりていく

歌を書く私と昼寝の夫のいて風鈴の音はしあわせのおと

夫と吾互いに名前で呼び合えばちよっぴり若くなつた気がする

幼の様に三時のおやつを待ち待ちて二時半なるに吾を呼ぶ夫

減塩とカロリー減の食なれば今日のおやつもクッキー二枚

卒寿まで暮せし父の隠居家を解体の音吾が胸を刺す

雷いかづち

東京 足立晴代

雲い乱れ雷かづち光り雨太し阿修羅の如き天と地となり

降り仕切る雨風強くこゝかしこあふれる川面流れ早くして

年ごとに水につかりし住人の此度こたびは水位いかにとゞめむ

滴したたりし汗ふく肌はに千金の恵みの風に暑さ忘るる

夜来の雨風はげしくも吹きつづききしむ扉の音高くして

美しき歌声響ひびき和らぎし心楽しく過すひととき

若人の熱氣溢あふれる甲子園スタンドの人々暑さや如何に

日々暑し納涼会の続く吾れ元気に過し感謝々々す

朝食後寝ねむ気に負けて横よこになり昼食の娘の声で夢さめる

熱中症他人事なりと聞きおりて我はならじと思おもう愚かさ

ホタルブクロ

沼津 鈴木孝雄

松木立身を寄せて咲くホタルブクロ梅雨に濡れつつ白さを増せり
夕暮れにハマユウの花白さ増し香り放ちつ虫引き寄せる

梅雨休み雲の間に間に青空がツバメも伸び伸び楽しげに飛ぶ

梅雨休み五時に目が覚め畑にと雲の上には青い富士山

ブックオフ閉店セールを實施中暇つぶしの場また失わる

ニンジンの種をまいて一週間二条に芽揃い豊作の予感

突然の暴風雨去り急ぎ畑にオクラは倒れナスの葉は飛ぶ

インゲンの葉っぱにまでダンゴムシ寛大改め総点検に

水やりにアオスジアゲハ跳んできて水に触れるやはや消え去りぬ

被害増すモザイク病を断ち切らんと散歩ついでに海草集め

雨傘

春日井 清澤 範子

学童は吾が家の前に集りて女兒旗を持ち並び行くなり

雨の日は学童並び雨傘を回しまわつつ行く色とりどりに

吾が家には息子は居ません娘です孫なき暮し少し淋しく

九十四歳の夫は幼き日の暮し思ひ出しつつ吾と娘に

朝毎にスピード信号気をつけよ娘に言ゐて吾の朝あさ

吾が夫の好物なりしかりもりを二ツに割りて味噌漬にする

堤防の桜の木の葉色深し流るる川の水細くして

鳥の声を賑わしく聞きつつ朝刊の配達さるるを床の中にて待つ

低気圧の通過の報あり今の夜は窓の庇に雨落つる音

時どきは姑ははの手紙を読みかえしやさしくありし姑を想ひぬ

喉元過ぎても

大阪 伊藤忠男

猛暑から酷暑に激暑炎暑すら言い表せぬかこの名古屋地区

こ暑さ蚊帳に行水夕涼み縁台将棋も死後にするなり

夜明けから耳を騒がす蝉時雨しばしまどろみ楽しみたくも

我慢耐え耐えて忍べば叶う夢樂しその日が目に浮かぶなり

木々に花星月愛でて歌を詠むさしずめこれら実利なきかな

照りつける夏の日差しに息荒げ今日も耐えるか満員電車

水墨画ここにもあるか山肌の見え隠れする梅雨のただ中

ただならぬ雨に風音夢の中耳に残して今は青空

文月に鶯鳴くか耳済ます時期外れとて心地よきもの

言論を弾圧すべきそれも又言うは自由と言うも自由か

棚経を

東京 森岡陽子

梅雨時に晴耕雨読とラジオ聞きつれづれなまま徒然草読む

夏越しの江島神社で厄落し心静かに茅の輪をくぐる

江の島で相模のしらす食す時隣りも隣りも並ぶ井

清水湧く窪地の馬頭観音堂小滝の流れ藪茗荷の花

夏の夜に春と思うか野良猫等みやあーごみやあーごとにやあーんと鳴く

千美子さんは茅の輪をくぐりふる里の母の幸せ神に祈るか

大粒のぼつりはじまる夕立に飛び込む店のコービー香る

炎天の暑さ凄じ辛き時開く扉の教会涼し

七月の盆の迎へ火焚く夕べ風とけむりと風鈴の音

澄みし声天に届きぬ棚経を僧侶涼しき紹の法衣着て

半夏生

東京 富岡和子

白い葉も夏の訪れ半夏生田植おわりて祭のころに

聞きおりしブルームーンの七月を待ちし当日台風ニユース

計らずも努力ひたすらなでしこにオウンゴールがワールド杯で

梅雨あけてすぐ猛暑日の浅草寺人出風鈴ほうづきに酔う

陽のおちて浴衣おとめら花やかでペンギン柄の帯の似合いて

ゆらゆらとスワンボートがあちこちに若者たのし井之頭池

日陰道さくら大樹は大様おわよに幼児ら燥ぎ若ママ談笑

〴〵元気だせ〴〵ミンミン蝉は大音で励ましくれる私の弱気

袖みのり年毎うれし剪定に酷暑の昼の風の抜け来る

体温と猛暑の温度同じなりエアコンだのみ夏ごもりなり

文月の雨

名古屋 近藤映子

検診日無き月何故か不安有りつゆ明けぬ雨の日よ

文月は曇り日雨日の続く地球温暖化と隣人はつげるよ

七夕におためし体操始めたり杖付きて老骨をきたへん

七夕の夜空は曇の広がりに一つの星も見えざる夜空

名古屋場所始まりたればふと夫を思い出では線香を上げぬ

文月の朝の曇りは昼に晴れ白雲東に流れ急ぐよ

八階の軒先ジット見て居れば雲の流れははつきり東へ

七月の中葉の台風十一号は本土上陸かベランダ植木を寄せぬ

見降ろしの香流川の水濁り昨夜の雨はそれ程の雨か

文月と言うが如しお便りの次々有は何より感謝

月下美人

豊川 山口千恵子

今宵あたり花開くらむ月下美人ふくらむ蕾上向きてきぬ

あでやかに夜のつかのま花開く一花のみの月下美人

一年を培ひてこし月下美人一夜かぎりの花かをりつつ

さわさわと青田渡りて吹く風は遠く四国の台風の風

梅雨の間を咲きて散り敷く凌霄花末の花一つ目の前に落つ

大木となりてあでやに凌霄花スエ先生に貰ひし苗木

野菜畑に一日来ぬまに太りすぎしオクラ幾つを切り捨てにけり

年毎に同じ所に生きてくるオシロイ花一度も蒔かざり

切りすてしオシロイの枝に黒き種地にころがるをはき寄せにけり

西日よけに植ゑたるナタマメ蔓の伸び支柱の網にその葉ひらひら

やつまいも

新城 半田うめ子

建長^{けん}の畑にて作りしさつまいも味のよかりし思い出すなり

父と吾^{けん}建長の畑守りきしうまきさつまいも作りし日思ふ

いづこかへ行きてしまひ秋江様やさしき友なり会いたき人よ

今日も又やさしき香奈の味のよく店に入りて楽しむ吾は

安城のしるこを食むなり時々にもちてくるなりやさしき女性

行在所跡

豊川 白井信昭

ばあさまが一人で草を抜いているお昼はすでに過ぎている

在所にて立葵あまた育てにき祖母の在りし日の面影にたつ

顧みれば床上浸水二度遭いぬ今に残れるは犬槇一本

いつもゆく行在所跡のまがり角桜一枝はみ出しにけり

昼日なか用水までの散歩道在所の畑に沿い行く処ところ

あしたは雨になるやもこの夕べランダにいで空を確かむ

浦島の境

横浜 阿部 淑子

梅雨のうち続々生まる台風は北上続け雨量いや増す

体温を超える気温に汗流し水分補給に忙がしき日々

暑き中通所続ける高齢者努力実りて勝る筋力

ソユーズの打ち上げ成功油井さんは夢を叶えて宇宙で活躍

六か月の割り安定期購入し年を忘れておめでたき我

お料理の巧みな友に招かれて五感満たされ浦島の境

ひめゆり

蒲郡 遠藤 脩子

大株を五株に分けしルドベキアふたりの友に貰われゆけり

花芯濃きヒマワリに似てルドベキアこの炎天にすつくと立ちて

会いたくて焦がるる思ひ日々募る医院待合室で貴女にバツタリ

日の当たる勝手口の脇に鮮やかな花卉散らしてノボタン咲き継ぐ

縁先に顔のぞかせて折り折りにシロ・クロ・ブチの三匹の猫

「散華」とふ大型紙芝居ひめゆりの乙女ら思ひつつ裏文字書き終ふ

吾亦紅

豊川 平松 裕子

エンジン音全開にして草を刈る夫は真昼の熱き時選びて

夫が刈りしあとに哀れなり吾亦紅皇帝ダリヤはあとかたもなし

今年こそその思ひも無慘あとかたもなく刈られたる吾亦紅拾ふ

皇帝ダリヤの一メートルの残骸を見てゐるばかり見てゐるばかり

岸に向きて頭を上げて向ひくる生き物にも見ゆ今日の白波

草一本なき畑にありしその姿彼岸にゆきて畑に草伸ぶ

味はひのある字

蒲郡 杉浦恵美子

掃除中見付けし夫の書き付けに三十年が一気に縮む

夫の字は下手の部類に入るけど我は愛でたりその素朴さを

綺麗より味はひのある字が好いぞ夫の字見て強く思へり

嗚呼正に書く字は体を表はせり飾らぬ人生夫は生きたり

今はもう我しか夫の字語れない愛しくもあり淋しくもあり

だが夫よ我が人生の灯は貴方の生きた証に求めむ

だしぬけに講師打診の電話あり離れて五年他人事みたい

さは言へど我が現在もこの先も教へることはもうないのです

我が心にけりがつきたる教職ぞ此処で不義理も致し方なし

お役には立てませんとの返答をしたが浮かない半日が過ぐ

入道雲五井山真上に湧き立ちぬ知らぬ間今夏の来たるを知れり

蒲郡駅ホームに立てば五井山と入道雲がぐつと近付く

蒲郡駅ホームに立ちて五井山を眺むるときぞ何時も慕はし

楊梅の赤紫の実をひとつ摘んでみれば指先染まる

ほんのりと甘い味する楊梅は山道一面零れているよ

楊梅と我呟けど同行者ふうんと一声振り返りもせず

雨の高雄山

豊川 夏目勝弘

高雄山の朝の靈氣に今一人聲なき聲を感じてゆかん

尺余りの岩の平に苔あつし我も座禪をまねびてみたし

白じろと水嵩ましたる谷川の瀬音のとどかぬ高さに居りぬ

仏道を修めむと九歳の少年の修業せしはこの静寂ぞ

三尺余の切り株の真中に開きゐる茸の傘に一点の紅べに

靈氣満つ樹下静場より湧き流るるやさしき瀬音感じてめくる

ウバユリの蕾は槍の穂先なし深き緑を切り裂く見ゆる

雨ふふみ樹下に広がる苔緑命のゆらぎ立ちたちてをり

同じリズム同じ音色の鳥の声深きカエデの緑のなかより

山頂の茶屋にて扇風機を所望して一服の抹茶のみど落ちゆく

『いよよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

十歳に受けし教えに今があると感謝をこめて息子は師を葬る
満々と水をたたへし田の面に早苗の緑の風にゆれをり

石田 文子

「おめでたう」晴れて迎へし結婚式ダンサーと吾子と花嫁も舞ふ
記念樹のこの松までも「切れ」といふまたしてもわが卒寿の義父は

森 厚子

畑へ行く夫の首筋黒々にその背に無言のお疲れさまと
雨ふふみ片手に重き薔薇の束かほり移りて指よりしたたり

山崎 俊子

青白き仄かな光そこかしこ平原の滝に飛び交ふ螢
螢の吾が肩かすめて飛ぶ今宵かのとときの君を今こそ思へ

三田 美奈子

山椒の青き実摘めば久米歌の古謡のリズム泛びてくるよ
暇乞ひと遙々岐阜より訪ね来し亡き父の朋輩遺影の前に

水野 絹子

住み人の住いなくなりたる本家の地あわだち草のただただ高し

悩みなき子育てなどは無きものとこの夜は娘に伝へむとおもふ

梅雨の間の水を含みし紫陽花のむらさき濃くして静かに咲けり
保育器の中にて育ちしわが孫よ母の温もり未だ知らずして

子ツバメの囀り今年はわが家になく今朝隣家よりしきり啼く声

祖母はいつも髪を一つにまとめし鏡の中に今日は私も

紀の川の流れて沿いて和歌山へ車中のわれは幼らに会ひに

そよそよと土手のススキの揺れてをり眺めつつ笑顔の幼と我は

花季にもレモンの木にはみどり葉なし芽吹きあるのか吾のおろおろ
暗がりのこのま夜の中車にて走りゐるかな独りになりたく

初夏はつの来たれば東京の友たちとまた語りたきをいろいろ思ふ

わが庭の大木となりし樅の木に今朝は「おはやう」と声のかけたし

牧原規恵

稲吉友江

鈴木美耶子

吉見幸子

牧原正枝

岩瀬信子

現代学生百人一首

東洋大学

夏休み最後の一日父と嗅ぐ歴史博の干し鰯ほかの臭い

昭和学院秀英中学校一年(千葉県)

佐藤 拓真

三人の努力が実ったノーベル賞日本の未来明るく照らす

昭和学院秀英中学校三年(千葉県)

江波え戸ぼ優と奈ゆ

新鮮な真っ赤なトマト口にして嬌恋の味舌が記憶す

和洋国府台女子中学校一年(千葉県)

高橋 美月みづき

現代人どの景色でも画面ごし真の感動知るよしもなし

千葉県立泉高等学校一年 林 ちさと

窓側のカーテン揺れる昼下がり飛行機雲に憧れていた

西武台千葉高等学校二年 小林 瑞季みずき

テスト前何故か始まる部屋掃除勉強開始はまだまだ遠い

西武台千葉高等学校二年 星野 一 樹

今までは「電話なんかで済ませるな」今では「せめて電話で話せ」

千葉商科大学附属高等学校一年 高橋 誠せい 哉や

ラインでは明日話そうと決めたのに廊下で会うとうつむく二人

東京学館船橋高等学校一年 山崎将太郎

冷蔵庫期限切れてるものばかり実習テストの終りし夕食

佐原準看護学校一年 根元 淳子

やどかりが夏の陽射しを受けながら築浅物件探し求める

学習院女子中等科一年 黒田 智ち 都と

私の一首

学校にも慣れて賑やか七色のランドセル行く葉桜の道

安藤和代

七月号より

登下校の時となると必ず元気な子供達の声が聞こえる。毎年の事ながら桜の咲く頃あわてん坊ものんびりさんも聞き取れなかった会話が葉桜の頃になると大きな声笑い声が聞こえる。子供はお国の宝どの子も健やかに育てほしい。「気をつけてね」声をかける。

子供が大好きな私は毎年この時季葉桜に映える七色ランドセルが見えなくなる迄見送るのです。

七夕の月隠れゐるこの夜空諦めつかぬ会えぬ寂しき

森岡陽子

何時になっても解決出来ぬ北朝鮮との拉致問題、親、兄弟、娘達が日本に戻って来る時を長い間待っている。何をする事も出来ず待ち続けている家族の皆様方の心持ちはどんなに辛いものでしょうか。考えるだけでも胸が痛くなる。日本でじっと待ち続けている家族の元に一日も早く戻れます様にと、祈らずにはられない。七夕の日に改めて日本人として。

駅前君の臉を見つめつつひとつの言葉を掛けて別れる

内藤 志 げ

「三河アララギ」平成十四年二月号

親に背を向け口を利かず高校を中退した孫。幼い時から泊りに来ると私と一つ布団に。一人でも泊りに来た孫。年子の兄との競争心も強い事が禍したか。私は心のやさしい孫と思われ、月に一度声かけをし豊橋から豊川の駅に出迎え何時も決まった店に二人で食事をし少家で休んだり畑の仕事を手伝ったりして、駅に送り別れる。今読み返しこの別れる時の思いが心に残る。

二十歳に働き始め人生を楽しんでいる様子。

鬱金桜と名付けられをり神社の庭に今満開の薄緑の花

弓 谷 久 子

今年の花見は少し趣向を変えてと子が案内して呉れた岡崎市上地八幡宮、小さな神社だけど市一番の古い建造物には歴史あり、その境内に只一樹薄緑色の桜が大きく枝を張って咲いていました。

咲き初めて一番の見頃の桜の名は鬱金桜、何と名にふさわしい花かと暫し見惚れて佇ちつくしていました。人も静かな境内に薄緑色の桜をめぐって満ち足りた私の今年の花見でした。

『俳句』

糠床は祖母より茄子の一夜漬

松本周二

方丈の廊下磨かれ朝涼し

白南風をつる草の葉をちぎりけり

川床涼し灯りともらば殊更に

山元正規

夕顔や下駄のちびたる坊の宿

こぼるるに風を恃まず夏落葉

江戸小唄市丸姐さん川開

今泉由利

一杯の水の涼しい江戸切子

葉桜や虫喰ひ穴の増えつづく

ハイピカス戦碑を飾る千羽鶴

川井素山

汐満ちて涼風わたる舟溜

明かり消す瀬音にまじる河鹿笛

青き眼の車夫駆けぬけて街涼し

小柳千美子

夏雲の大き影ゆく草千里

号令に子ら整列す日輪草

炎天下飛び乗るバスの中涼し

重野善恵

色褪し紫陽花剪れば梅雨明け

梅雨明や窓辺を花で埋め尽くし

いにしへの皇女の塚や苔の花

田中清秀

幾千の星のまたたく磯涼み

大岩に白波はじけ夏盛ん

からころの音や浴衣の波模様

森岡陽子

川開き江戸の名残の蕎麦御膳

よどみなき僧侶の読経風涼し

大夕立墓を洗ひて去りにけり

山迫京子

身に余る功德や四万六千日

リード曳き犬も片蔭選びゆく

初蟬の柳一本震はせり

柳田皓一

暗闇に海亀まてば風涼し

一処千匹ほどの蟬しぐれ

夏草の屋根の一辺占めにけり

和田勝信

白波の海風涼し日和山

夏の浜千の鷗の乱舞かな

うなずいて雀飛び立つ梅雨晴れ間

植村公女

鹿の子に見つめられをり東大寺

寂しさの果ての安堵よ送り盆

かさね吟行会

「目黒碑文谷界限」七月

田中 清秀 吟行記
山元 正規 選句

鐘楼の日射し幽かに木下閣
仁王像かつと睨むる梅雨の空
梵鐘を指で弾きて若葉風

素山 善恵
清秀

正月は神社の初詣で家内安全を願い、結婚は教会で永久の愛を誓い、葬儀は寺院で霊を弔う、決して無神論者ではないけれど宗教に対して大様なのでしょう。こんな日本人のメンタリティは世界では理解されないかもしれない、今回のかさね吟行会は正にこの大様さを地で行くような企画である。平成二十七年七月十日、参加十一名で目黒区の碑文谷界限を散策した。

まずは寺院、経王山文殊院「円融寺」、千年以上の歴史を有する天台宗の名刹である。国の重要文化財で都内最古の木造建築物の釈迦堂、碑文谷の黒仁王として人々から親しまれている山門の金剛力士、寛永年間（一六四三年）に作られた谷中の天王寺と同作の双子の梵鐘などがあり、静寂で荘厳な境内は思わず手を合わせたくなる神秘的な雰囲気包まれている。幸い当日は梅雨晴間、しばらく続いた長雨が一時的に晴れ鬱蒼とした青葉からの木洩れ日は初夏を思わせるような雰囲気を感じさせる。

続いて目黒サルジオ教会を訪れる。この教会は千九百五十四年に建立された「江戸のサンタマリア」に捧げられたカトリック教会である。キリシタンの遺物である「悲しみの聖母」（十七世紀）の美しい絵画は、本物は国立博物館に収蔵されているがそのレプリカが聖堂の横入口に掲げられている。聖堂の正面にはキリストの受難と死去そして復活の象徴である磔刑像、飛昇天の聖マリア像、聖ヨハネ・ボスコ像などが並ぶ。堂内は一千平米メートルの広さで両側を数多くのステンドグラスで飾り、日の光で色彩豊かな輝きを放っている。

キリスト教徒でなくとも木椅子に座り祭壇に顔近づきイエスとマリアに祈りを捧げる、自然とそんな気持ちになるのは不思議である。

磔像や木椅子涼しき大聖堂
教会の奥に入りゆくほど涼し
絵硝子の増す輝きや梅雨晴間

正規 皓一
文彦

さらに進む、道路脇の街路樹は栃の木に青い実がなり、泰山木が茂り住宅街の爽やかな風が木陰に吹き渡る。

次は碑文谷八幡宮に参拝する。元々は源頼朝の武将畠山重忠の守護神として奉られ祭神は応神天皇、江戸時代には碑文谷村の鎮守であった。碑文谷の地名の起りとなる「碑文石」が保存され社の脇に展示されている。境内は樹齢数百年の大杉がそびえ、楠や椎の大木で鬱蒼としている。魔除けの子を抱いた狛犬の石像が可愛らしい。また、春には一の鳥居から二の鳥居まで桜の花で溢れ桜の名所となるらしい。

神の苑鳩翅を乾す梅雨晴間
神殿の四手の白さや梅雨晴間

周二
由利

最後はすずめのお宿公園にある古民家を見学する。江戸時代に「年寄」を代々努めた栗山家の母屋を竹林の生い茂るこの地に移築・復元し公開されている。構造材にはケヤキやスギなどを使い、居間にはいろりが切られ、ほの暗い室内は行灯で照らし出されている。特に黒ずんだ三本の太い大黒柱は歴史の重みを感じさせる。虫除けに竈で燻す薪の煙や土間に置かれた豚形の蚊取りが懐か

しい。皆、思い思い作句の工夫を胸に縁側で涼をとりながら暫しの休息をとる。

竹林をたやすく抜ける黒揚羽 京子
竹林を抜け来る風の涼しさよ 陽子
古民家の縁に涼とる真昼かな 千美子

句会は公園に程近い大岡山東住区センターの会議室を借りて開催、囀目三句出し。神社・仏閣・教会・古民家と今日の俳句の題材は豊富である

■かさね吟行会■

日時 九月十一日(金)

場所 都立林試の森公園

集合 武蔵小山駅(地下鉄三田線・南北線)

改札口 十一時

申込 森岡陽子宛 (03)3712・2835

『酔いの徒然』（四一）

丸山 酔宵子

『日比谷のしもた屋風レトロ食堂』

日比谷と言えば帝国ホテル、ペニンシユラホテルがあり、東京宝塚劇場やいくつものロードショウ映画館がひしめいている。そして日比谷シャンテなどのファッショナブルなお店やお洒落なレストランもあり、将に日本のブロードウェイ。今でも年間100本もの映画を見るので、この界限には学生の頃から通い続けている。

噴水前にはゴジラの銅像、石畳のフロアーには往年の銀幕スター達の手形が埋め込まれている広場の横道に、周りの建物とは異質なレトロなガラス戸に、色あせた暖簾がかかった、しもた屋風建物が目に入ってくる。アジ

フライ定食700円、玉子丼定食800円と白墨の手書きで書かれた脚立の黒板看板が、開けっ放しの入り口前に無造作に立ちかけられている。

店内に入るとそこは薄暗い裸電球の昭和のレトロ世界。土間風の床にはカウンター4席にテーブルが4卓。「いらっしやい。今日は早いですね・・・」背筋がピンと伸び、赤いスリムのパンツにバンダナを冠った年齢不詳のお母さんが声をかけてくる。「いつもの玉子丼定食・・・」お母さんはカウンター越しに調理場にいる小柄で眼鏡を大村昆風に掛け、ブカブカの野球帽のつばを後ろ向きに被ったご主人に向かって、「玉井セット・・・お願いします・・・」と丁寧にレピーとするのである。

店の名前は「いわさき」。現当主が3代目で、初代は、詐欺恐喝窃盗は一切しない前科五犯、忠君愛国の士である暴れん坊で有名な岩崎善右衛門。店内の入り口横の壁

には、古ぼけて煤けたガリ版刷りの岩崎善右衛門の本物
ての一献・・・、これもまた格別である。

手配書が貼ってある。「おでん屋」がルーツで有楽町ガー

ド下で本邦初の正式営業認可を取った由緒ある店なので

ある。岩崎善右衛門は「おでん屋」でありながら一方で

は社会活動家の肩書きを持つ変わり種で、「おでん屋」

で稼いだお金を投じて昭和初期に千葉の中山に岩崎私立

養老院という養護施設まで設立したそうさ。

現当主は、昭和32年、2代目が突然亡くなり当時20歳

で、調理修行もなく引き継いだのだ。「その席はね、

渥美清さんがいつも座っていたんですよ・・・」「東宝

や宝塚の女優さんもよくいらっしやいました・・・」

「いわさぎ」に通って半世紀。今までは昼食のみであつ

たが、最近では、ロードショーが終わった夕刻5時過ぎか

ら、冷奴、納豆そしてキャベツいっぱいのはムエツグ等

で菊正一合瓶をぬる爛で・・・。映画の余韻もアテにし

ロードショー余韻を冷ますビールかな

酔宵子

ある自然科学者の手記 (40) 大橋望彦

六日目に石巻に着き、高木と言う処に泊まり、此処から七八日行けば有名な松島であります。翌早朝、日の出を拝しながら松島を過ぎ、流石は日本三景の一とその風景を称えました。原野町で、昼飯を済ませました。仙台まで四里申します。街続きで多くは仙台の土族屋敷か、門構えで、塀は杉垣、又は板塀であります。躑躅ヶ岡と言う今の連隊(旧陸軍の大変大きな部隊)の在る所は、普請最中でございました。仙台の町外れの長町へ宿を取りまして、有名な芭蕉が辻の見物を思いだち道のりは何程あるかと、宿の下女に尋ねましたら『二里ほどアンベッチ』と言って笑っております。その言葉の可笑しさと、道の遠いのに呆れ、草臥れた足で二里の道は無理だと諦めました。

流石に、仙台からの道路は、広々と松並木があり立派です。又見渡す限りの平野に米は豊穰り、大名の城下丈の事はあると、尽々感心致しました。此の街道で初めて人力車を見、便利でよく走るのに驚きながら、白石で昼飯、この辺は石山道、凸凹が多いのに難渋致しました。

玉上様には、其の前後でお別れましたので、なるべく安宿を探し都会地には宿らぬことに致しましたから、福島には泊まらず、昼食丈とりました。南部から出てきた世間見ずの田舎者が、都会地を通りますと、色々と美しい立派な物が目に付きます。呉服屋が沢山あり、店構えの派手な事。又上等な反物、美麗な染模様衣服等、目を驚かす物ばかりです。遂に羽織紐と襷と節糸織三反を土産に買い求め、福島を後にして二本松へ参りました。此処は戊辰の戦いに我が藩と同盟の城下で、官軍に城を焼かれ、敗軍の憂き目を見たので、私達と同じ境遇の家が多いのであります。縁りの土地と、名物の羊羹を買い、会津境。中山峠へ差し掛かりました。此の峠は、会津名うての要害の地、藩士が散々官軍を悩

ました所丈あつて、上りが急で、中々の難所でございます。漸う峠を越しますと、目の下に青々とした湖が、鏡の様に目に映り実に佳い景色です。あれは、会津で名高い猪苗代湖だと聞かされ、今迄の疲労も全く癒えた心地がし、会津も程近いと思えますと、長旅の苦勞も忘れ、ひた走りに峠を下りました。

某村に一泊し、翌日昼頃、懐かしの故郷会津若松へ帰り着きました。尤も途中、滝沢峠を下った所に坂下と申して茶屋が二三軒ある場所が御在います。会津藩士が東上の行き帰りに此の茶屋迄見送り、又帰りをお待ちする所で、父の在世中は度々着飾つて、お見送りお出迎えをした懐かしい茶屋で御在います。縁深い峠に立つて過ぎ来し方を思えば、変り果てた此の身姿：今こそ帰り着いた懐かしい故郷：込み上げて来る嬉しさと悲しさに目が曇つて参ります。何はともあれと、この茶屋に上がり、髪を撫で、衣服を改めまして、田名部を出達以来二十三日目に愛宕町の大七へ一先ず落ち着いたのでございます。

『骨肉の縁』

国亡びて、山河青しとか、会津若松の鶴ヶ城は、昔の儘に高く聳えて居りますが、屋根瓦は落ち、白壁は破れ、徒に鳶が生い茂り、彼らの要塞を誇つた深堀は一面の藻草、蓮の葉は落ちて水鳥独り轉るに任せて居ります。御殿跡の杉木立は、甍を尋ねる鳥の声騒がしく、場内は寂として人影もございません。大手の太鼓門辺りは、激戦の跡が未だ物凄く残つて、朱に染まった鳶(たづな)にも胸を騒がせます。父の亡骸を葬つたと聞えた空井戸は、天主台の直ぐ西下にある筈ですが、その辺一帯は人の丈程もある雑草が生い茂つて居りました。或る日此処に草を分けて、何物かを捜し求めいる親娘の姿がありました。それは、私と私の母であります。

時は、若松へ帰つてから五年ほどたった頃、お城には誰一人住む者もなく、管理人とても御在いませんから、荒れ放題に成つて、鳥獸の棲家となつて居ります。只時折、不浪人や乞食が、一夜の

宿を求めるか物探しに来る位です。ある時乞食共が、古井戸の中を探して居りますと、古着や刀劍の折れたのが沢山出て参り、其の上白骨も多数に現れました。其古井戸は、どうやら父の亡骸を埋めた所らしく、真つ先に戦死した父の白骨は一番下に埋まって居る筈で御在居ます。骨と成っては誰のものか解りませんが、何か遺品でもあれば、空頼みに、二人して古井戸を見にきたので御在居ます。

搔き窺られた雑草の中に、土に塗れた白骨や、ボロボロの布切れが其処此処に散らばって居ります。傘の先で、かれこれと選り分けて居ますと、不思議にも私の柄の先に当たった白骨。見る見る内に骨の髄の方から、赤く血が滲んで参ります。私は恐ろしさの余り蝙蝠(傘)を投げ出しました。母はこれを見て『骨肉の縁しが在れば白骨も赤み、又は自分の鼻から血が出る事があると聞こえて居る、父の遺骨かも知れぬ』と申します。猶よく探しますと、小切れが二三見当たりました。之は確かに、父の肌着の切れ端に相違ない、御出陣の時御着せ申したものに違いない。

それならば、この白骨は、父のものかと懐かしく、恐ろしさも忘れて、蝙蝠の柄で尚も辺りの白骨を調べますと、血の滲み出るのが彼方此方に御在居ます。まさしく父のお手引きと存じまして、この白骨を拾い上げ、一纏めに致し、小切れと共に、骨壺に入れて阿弥陀寺に持参し、戦死者の亡骸を葬った場所の南東の隅へ懇ろに埋葬致しました。

『運命』

人には、生れた時から定まった運命が御在居ます。敗軍の会津藩士の娘は、それ相当の運命を持って生れたので御在居ましょう。御家老山川様の御妹御、捨松女史が、米國へ留学せられたのを羨ましく思つて、青森の野田様の女書生となり、野田様の御親切に甘え、一家一族上京して勉学の上、捨松女史の御後からでも、外国留学生をと夢見て居たのでありますが、神様の御悪戯か、幸

運は、左様に簡單には廻つて参りません。

田名部から上京の途次、故郷の会津へ立ち寄る事となり、二十三日目に、一番馴染み深い大七へ恙なく落着いて、親戚の土屋新平(母の叔父に当る方)を、お訪ねしまして、上京の旨詳しくお話致しますと、叔父は意外にも不同意。『父の遺言により定まった養子があるのを捨て置いて、女の身で東京に修業にでるとは、以ての外ある。』と、頑固に反対されます。

大七へ到着前、野田様からお便りがあり、丁度公用で新潟へ出張して居る、都合よくは当地へ廻られ度い、東京へ同道すると、申越されていきます。母は進退に、ほとほと困られた様子であります。

又一時五ノ戸町に居つた養子の小太郎も、この時は清治袋村に帰つて居りまして、私共の上京に就いて快く思わず、何彼と故障を申します。『光子が上京するのは、勉強の為で修業さえ済めば夫婦にしてやる。貴方の養子であることには何も差し障りはないのだ』と、母から諄々と諭されて、一応は納得を致しました。

然し、私共の上京が何と無く不安でたまらず、土屋の叔父に頼んだものと見え、間も無く叔父がやつて来て、『夫の遺言を反故にする心算か。女子には教育学問等必要はない、断じて上京はさせぬ』と、大変な剣幕で御在居ます。母も私も、泣き度い程残念ですが、土屋の叔父は、有名な頑固爺で、小野の権五郎といわれ(母の美父、小野権之丞の弟で幼名五郎、後に土屋家の養子となる)その名を聞けば泣く兒も黙ると、家中で評判された位、一日言ひ出たら最後、金輪際後へ引かぬ強情者で御在居ます。

母も永年の苦勞によつて、胆も練れ、腹も座つて居りますから五郎叔父の威し位で、方針を変える様は御在居ません。然し『夫の遺言』と言ふ一言には勝てず、不人情な分家と知りつつも小太郎を養子と決めたので御在居ます。

私にとりこの上もなき好運、野田様から再々のご厚意を無にせねばならぬ破目に陥りましたのも、授かった定命であると、諦める外無かつたので御在居ます。

絹の話 (58)

「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

絹と綿、麻

【綿が普及するまでの庶民の着物】

今日、綿のない日常生活などは考えられません。

ところが、日本で絹が作られ始めてから約2千年、綿は5百年弱にしかありません。一般庶民の着衣となるのは江戸時代中期（江戸より西）からです。綿は絹や麻を作る労力に比べたら、量産、加工も簡単で、軟らかく温かで、健康維持に大いに役立った事は言うに及びません。

それまで、人々は何を着て冬の寒さを凌いで来たのでしょうか。それはその地域々に自生する草木から筆舌し難い労力をかけて繊維を作り、布に織って着て来たのです。楮（コウゾ）、殻（カジ）…太布（タフ）古い時代の白妙。科（シナ）…科布、信濃布。楡（ニレ）…アイヌの衣装にもよく使われた。藤、葛（クズ）…艶があり張りがあるので、古くは武士の袴袴に用いられました。苧麻（チヨマ）、大麻、糸布なども多く使われたようです。16世紀にフィリピンから沖繩に伝わった芭蕉布等は葉芭蕉（バナナ）のなる実芭蕉とは違う）の木1本から僅か5

gの糸しか採れませんので、1反織るのに200本の葉芭蕉を使うといえます。

これ等の生産力は糸作りや織の手の掛ようで製作時間に大きな差が出来ますが、一生懸命やる人で、年間3反と言われています。今日でも伝統工芸として、また有志の方々が古来からの織物に取り組んでいますがいずれも後継者不足に悩んでいます。東北地方では綿花栽培が不向きであった為、江戸時代後期になっても綿が一般化せず、綿の古着1反と自分たちで織った麻布3反を交換したと云う話も有りますので、綿は庶民にとっていかに貴重品であったか理解出来ます。そうして手に入れた木綿は刺子やこぎん、裂織りになって最後まで使いこなしていたのです。

【綿の来た道】

日本に綿花の種がもたらされたのは15世紀三河湾の矢作川河口に漂着した混雑論人よるとされていますが、この種からは気温の関係で育たなかったと言われています。現在の愛知県西尾市の天竹神社に当時の種を入れて来た素焼きの壺がご神体となっていて、例大祭は古式ゆかしい綿の弓打を奉納しています。

綿の栽培、流通を促したのは織田信長でした。

また、綿がよく染まる藍（綿は絹の様に草木で多彩な色は染まり難い）の栽培も同時に促進させました。当時綿は経済力をつけ始めた一般大衆の需要を背景に絹とは違った莫大な利益をもたらすものになって来ました。豊臣秀吉は綿を大量に手に入れるべく、綿の原産地天竺にまで攻め上ろうとして、日本より綿生産の盛んな朝鮮に出兵をしたのではないのでしょうか。

綿を初めてヨーロッパに伝えたのは紀元前4世紀アレキサンダー大生の東征と云われています。アレキサンダーがヒンドウークシ山脈を超えインダス川を渡り、インドのパンジヤブに攻め入るとインドの兵や人々は綿を着ていたと伝えられています。勿論、戦利品として持ち帰っていた事でしょう。

この後花開くギリシャ系文化とオリエント系文化が融合したヘレニズム文化はインドから綿も運ばれて来ていると思われまます。

こんなに早くから綿は地中海からヨーロッパ方面に伝わったのに、日本には千数百年後に伝えられたと云う事はどういう事なのでしょうか。

絹の製法が西方になかなか伝わらなかったのは、莫大

な富をもたらす絹の製法を安易に教えなく、独占を維持する事が中国歴代の王朝の経済政策でしたからです。

綿は重くかさばるので海上交易が拓けて来なければ輸送に不向きであったと思われる。また綿花栽培には氣候が大きく左右するので、ある程度品種の改良が進められなければ、より北の栽培が難しかったのでしよう。

【揚げる、績む、紬、紡ぐ】

上記はそれぞれ糸を作るときの用語です。

現在では殆ど「紡ぐ」が使われ、区別がはっきりしなくなつて来ました。

絹糸を作るときは7個〜10個の繭を煮ながら一緒に上に引き上げて1本の糸を作るので「揚げる」と書き、これが生糸です。ただ繭ケバや切り繭などは1本の糸を揚げる事が出来ないので手で撚りをかけながら糸作りする事を「紬」と言います。

大量に機械生産等の時は「紡ぐ」と書きます。木綿も同じです。紡績会社、絹紡糸、手紬など。それらに比べてすっかり使われなくなったのが「績む」です。麻などの糸作りのときは「…糸を績む…」と書きます。文字の使用頻度も生産量に比例している事が解ります。

短歌に詠まれた茂吉

—あるいは茂吉を詠んだ歌人— 四十八回

「月虹」 鮫島 満

二十三 佐藤志満

戸を閉してひそけき強羅山荘の積れる雪に杉の葉散
れり 『草の上』 昭和二十九年

詠まれている強羅山荘は神奈川県箱根町にある茂吉の別荘であり、茂吉の滞在中には夫の佐藤佐太郎が使用として、あるいは手伝いとして頻繁に通ったり泊まつたりしたところである。右の歌は茂吉死後の翌年に訪ねたときのものである。「戸を閉して」に、主のいない寂しさが表れている。

西日さす今宿の薬師堂の坂もの悲しくてわが下りゆ
く 『渚花』 昭和三十八年
もみぢせる桂の高木あかるくて聴禽書屋のうへの夕
光

大石田での作。一首目「今宿の薬師堂」は大石田滞在中の茂吉が好んで足を運んだところであり、作者の脳裡

には長靴を履いてここに来た茂吉の姿が蘇っている。二首目は茂吉が二年余を住んだ聴禽書屋を訪ねたときの作。このころはまだ書屋の庭には桂の大樹が茂っていた。

宝泉寺のみ墓に立てば遠々に刈田夕映えて稲塚並ぶ
同・昭和三十八年
み墓べに柿のもみぢ葉赤くして宝泉寺境内すでに夕
ぐれ

題詞に「金瓶」とある。宝泉寺は茂吉の生家近くにある。茂吉の墓のある寺である。

先生の日記書簡など公けになりしを夫ながく悔みき
『身辺』 昭和六十三年

夫の佐太郎は『斎藤茂吉全集』の編集者の一人である。最初の全集の第一回配本は昭和二十七年一月であった。この全集に佐太郎は多くの資料を提供したが、死後の公表を戒める茂吉の言葉を守らなければならないものもあった。新版の全集の第一回配本は昭和四十八年一月であった。この時は、茂吉の意に反して旧版には入れなかつた書簡やメモなども公にされつつあったために多くの資料が増補された。その一つに、たとえば、茂吉が愛人の永井ふさ子に宛てた書簡一三〇通があった。また永

井ふさ子自身は単行本『斎藤茂吉・愛の手紙によせて』を刊行した。

全集編集者として抱く師の秘密を明らかにすることへの忸怩たる思いは察するに余りあるものがあるが、右の歌は「悔み」続ける夫の心を詠んでいる。

先生に名を賜はりし長女肇子祖母となりたりわれ生
きをりて
『小庭』平成六年

作者が茂吉の媒酌で佐太郎と結婚したのは昭和十三年で、十五年には長女が生まれた。名付け親になった茂吉は作者の住む青山の同潤会アパートをしばしば訪ねてその成長ぶりを見つめ続けてくれた。歌には、それから数十年、茂吉も佐太郎も亡くなってのち、長女に孫が生まれたという感慨が込められている。

先生の病院跡に建つ歌碑を今日つくづくと立ちどま
り読む
『雨水』平成九年

「先生の病院跡」とは茂吉の養父紀一が建てた青山脳病院の跡のことである。この病院は茂吉が四年間のヨーロッパ留学を終えて帰国の途に就いて香港、上海間の船上にいたときに全焼した。ここは『赤光』『あらたま』を生んだと言ってもいいところで、昭和五十三年に『あ

らたま』の代表作「あかあかと一本の道通りたりたまきはる我が命なりけり」（大正二年作）を刻んだ歌碑が建てられた。青山に住んだ作者には忘れられないところであり、尽きることのない思いが蘇るのである。

小学校一年の時の先生を思ひ出でをり八十六にて

同・平成十二年

茂吉が山形県の金瓶尋常小学校に入学したのは明治二十一年である。歌には「思ひ出でをり」とあるが、もちろん聞いたり読んだりした茂吉のことを思い出すのである。その話の中には、茂吉が夜尿症であったとか頭のいい子だったとか絵描きになりたいと思っていたとかというようなことがあったはずである。結句には、こんなに老いてからそんなことを思うのは不思議だが、というような思いが籠もるのだろうか。

わが歌を直してくれし事遂になし氣に食はざれば窓
より投げぎ
同

歌の配置からみて茂吉を詠んだものと扱ったが、歌の主体は佐太郎なのかもしれない。茂吉が作者に対してこのように辛く接したとは思えず、佐太郎ならさもありな
んと思われるからである。

楽しい時間 34

山本紀久雄

2015年7月31日

手仕事への回帰(2)

この連載も30回を超え、当初の書き出した意図とは、ずいぶん変わってきている。

「楽しい時間」を書くかと思つたのは、毎月第二土曜日の14時に、京浜東北線の蕨駅西口から歩いて7分の「いーとぴあ」で、この辻照子先生教室「マナー&パーティーコーディネーター」に何年も通っていて、いつも「楽しい時間」を過ごしているの、その体験内容をお伝えしようと思つたから。

しかし、当方の環境条件が変わってしまい「いーとぴあ」へ行けなくなったので、タイトルはそのままにし、その後に出あう「楽しい内容」を今は書いている。

今回、改めて、もう一度、今まで、どのようなことを書き連ねてきたか、最初から読み直してみたところ、大きな間違いに気づいたので、まずは、それを訂正し、お詫びしたい。

訂正内容は2013年12月31日の15号でミルフィーユ mille-feuille で、次のように書いたものである。

『「いーとぴあ」の明るいフロントに入ると、笑顔がステキな和田さんが『今日は立食ですよ』と、いつものすきとおる声で語りかけてくれる。なるほど、そうか、今日は12月だからクリスマスパーティースタイルかと納得する。』

辻先生の料理三品もパーティーアイテムで、①チキンロール、②ホタテのガーリックバター、③春巻きミルフィーユ

mille-feuille。フランス語で mille は「重なる」、feuille は「葉」を意味しますよ、と辻先生の補足。さすがにフランス通だなあと、これもまた納得する。」

この中の mille は「千」という意味が正しいのに、「重なる」と辻先生が語つたと書いたが、これは私の完全な間違いであった。

一般的に mille-feuille は「千枚の葉」と理解されているので、辻先生及び読者の皆さんにお詫びし、訂正させていただいたばかりです。

では、前回に続いて「手仕事への回帰」という聞きなれない内容に入りたい。

織り技術は人類史の中枢技術

国立民族学博物館・吉本忍名誉教授は、何故に、このように織機に熱心なのか。その根源思想を吉本氏は次のように述べる。(参照「手織物と織機の通文化的研究2010-2013」国立民族学博物館『民博通信No.132』)

「織物を織るという技術は、人類が新石器時代に獲得した主要な生活技術のひとつであり、われわれの生活に不可欠の技術として、今も世界の広範な地域で継承されている。このことに異論はないと思われるが、織り技術が新石器時代から現代に至る人類史の中枢技術のひとつとして位置づけられることについては、これまであまり知られていない」

織り技術が人類史の中枢技術であるとは、ちよつと信じられない。

吉本氏の主張を続ける。

「たとえば18世紀後半にイギリスで始まり、その後世界に波及した産業革命のみならず、1980年代以降に急速に発展を遂げたコンピュータによって引き起こされたIT革命

もまた織り技術と密接に関連している」

産業革命やIT革命にも密接だという。ここでも本当かと疑ってしまう。続けたい。

「産業革命は、イギリス国内産の羊毛や植民地であったインドからもたらされた綿花などから大量の糸を紡績し、それらの糸を使って大量の毛織物や綿織物などを織るために、それまでは手作業で生産されていた糸や織物が蒸気機関で稼働する紡績機械によって生産されるようになったことを契機として始まった」

その通りと納得する。

「IT革命が、19世紀初頭のフランスでジョセフ・マリイ・ジャカード織機（複雑な模様を織るためのパンチカード・システム）の出現に起因しており、そのパンチカード・システムをもとにコンピュータが発明されたことを知る人はさほど多くない」

ここでパンチカード・システムを、記憶の彼方から思い起こし、それがジャカード織機というものから発したという因縁話に驚く。はじめて知った。そこでウイキペディアをみる

「穴の開いたロール紙をはじめて織機に使用したのは1725年ごろのBasile BouchonとJean-Baptiste Falconで、1745年にジャック・ド・ヴォーカンソンがこれを完全自動織機にし、1801年にフランスのジョゼフ・マリイ・



ジャカード織機用のパンチカード

ジャカードが大きく改良しパンチカードにし、自動織機を制御して複雑な模様の布を織るために使用され、世紀を超えて使用され続けた」

ウイキペディアを続ける。

「ジャカードの自動織機に触発され、アメリカのハーマン・ホリスがパンチカードによる集計機タビュレーティングマシンを発明した。当時、大規模な移民の受け入れにより急激に人口が膨張しつつあったアメリカでは、1880年の国勢調査が1889年になっても集計が完了しないという問題を抱えていた（これには、単純な人口の増加だけではなく、集計する項目が増えたために当初の手作業システムが破綻したのだと言われる）。計算している間に人口が大きく変動してしまうこの状況を解決したのがパンチカードによる集計機タビュレーティングマシンで、これによって集計のスピードは10倍になったという」

ここでようやく織機が今の生活に欠かせないコンピュータと結びついている経緯がわかった。

織機への情熱

しかし、何故に、吉本氏はこれほどまでに織機に熱心になったのだろうか。

それについては、日本経済新聞・文化欄「織物、手仕事の技は多彩」（2012年9月5日）で吉本氏が次のように語っているが、紙数の関係で今回はここで終わりたい。

7月27日（月）、2月以来久し振りに、吉本氏と渋谷・ヒカリエで食事した。「今日は福島調査活動からの戻りです」と、相変わらずの黒ずくめの服装で、話題は織物に集中する。東北タイではじめて会った時と全く変わらない。情熱にブレがない。見事だと思う。続く。

楽しくマナー ③

辻 照子

「ブランデーで素敵に」

パーティのご馳走は「楽しい会話」、そして「新しい友人が出来る」、というメリットもあります。

今回試飲するブランデーはVO(Very Old)とVSOP(Very Superior Old Pale)。

・ストレート：手のひらでブランデーグラスを包み温めながら香りと味を楽しむ。

・水割り：グラスにたっぷりの氷を入れブランデーを注ぎ、ステア（かき回す）シミネラルウォーターを注ぎ、もう一度ステアする。

・ロック：冷えたグラスに氷を入れブランデーを注ぎ、ステアする。

・ニコラシカ：細いフルート型のグラスにブランデーを注ぎ、レモンスライスのをせ砂糖を盛る。レモンを二つ折りにして噛み、ブランデーを口に含む。

・カフェロワイヤル：カップにコーヒーを入れ、先端部に引く掛かりのあるロワイヤルスプーンにのせた角砂糖にブ



ランデーをしみこませ、火を灯しコーヒーに沈める。部屋を暗くして青い炎を楽しむ。

このカフェロワイヤルを「余の辞書には不可能という文字はない」と言ったフランスの英雄1769年地中海に浮かぶコルシカ島(Corse)で誕生したナポレオンが愛飲していたという。因みにナポレオンというブランデーの由来は皇帝ナポレオンI世の男子誕生の年に葡萄が豊作だったため、この年に造られた物を「ナポレオンブランデー」と。以来、貴重なブランデーにナポレオンと名を付けるようになったと云われています。

ブランデーの演出も楽しいけど、自己演出法、リフレッシュ法で自分を素敵に演出されると良いですね。

・努めて若々しく幸せそうに見えるようふるまう。

・近い予定の中で興味のあるものを見つめる。

・後ろ姿に気をつける。

・笑いたくなくても大きな声で笑ってみる。

・大声で歌を歌う。

・過去の出来事で楽しかったことを思い浮かべる。

・良い香り(アロマ、コロン、香水等)を付ける。

・明日(未来)のことを楽しく想像する。

「今日のお話し、私のための内容のようで元気ができました」先月、大切な人を亡くし声にならない日々を過ごしてたと、涙をこらえながらハグをして来た彼女とただ見つめ合った帰る際。

企業や金融機関の会議室やホテルの会場などでマナー講演後、この時だけの出会いにも関わらず私の周りに来て質問したり話し込む方が大勢いる。同じ様に継続クラスや自宅ク

ラスでも思いを素直に表現して下さり、先程の彼女と重なる事が多々あって、いつまでも温もりと優しさが心に残っている。

「夫は昨年から天国に単身赴任してるんです」。「沈んでいる自分じゃない私が普通に皆と話したいし、お酒も飲みたいので」。悲しみの笑顔で夜遅くまで語り明かし翌朝、居間の窓ガラスを通して海に浮かぶ初日の出を見つめる母娘。

「多くの人とふれあつて活き活きとしている二人でいて欲しい」と長い闘病後、桜の季節が過ぎ新緑の頃に逝つてしまった母の言葉に押し寄せ、梅雨の晴れ間のクラスで優しく寄り添う夫と共に、涙を浮かべながらも皆と楽しいひと時を過ごした姉妹。

人と出逢い、触れ合うことによつてお互いが影響し合い、よりよい関係が築かれていく。

「まだまだこれから」クラスを続けてゆきたく思います。

今日のレシピのミックススムージーにブランデーを加える
と高級感のある大人の飲み物に変身する。

■柔らかビーフステーキ

材料(4人)

牛切り落とし肉 400g 貝割れ菜 1パック
A(玉ねぎすりおろし 中1個分 おろしニンニク・しょうが 各1片 醤油 大3 酒・砂糖・酢 各大2)
塩・粗びき黒コショウ 各少々 サラダ油 大2
作り方

①牛肉に塩・胡椒をしてよくもみ、等分にし2cm厚さの小

判形に整える。

②フライパンにサラダ油を熱し、①を入れ焼き色がついたら裏返し、1分30秒位焼き取り出しホイルで包んで余熱で火を通す。

③Aの玉ねぎを入れ3〜4分炒め、残りの材料を加え、汁けがなくなるまで炒め煮し、②にかけ貝割れ菜を添える。

■トマトと玉ねぎのサラダ

材料(4人)

トマト 2個 玉ねぎ 1/2個 いんげん 4本 A(すりごま 小2 醤油・酢 各大1 みりん 小2) ガーリックトースト 適宜
作り方

①トマトはくし型に切り、玉ねぎは薄切りにし、いんげんはレンジにかけ斜め切りにする。

②混ぜ合わせたAを①にかけ、ガーリックトーストを添える。

■ミックススムージー

材料(4人)

フルーツミックス缶 1缶 プレーンヨーグルト 1C
牛乳 3C はちみつ 大2 ミント 少々
作り方

①冷えたフルーツ缶(シロップも)、ヨーグルト、牛乳、はちみつをミキサーにかけ滑らかにし、冷たいグラスに注ぎ、ミントを飾る。

「歴代天皇御製歌」(四十一)

貫名海屋資料館

『崇徳天皇』第七十五代・在位 一一二三年(五歳)―一一四一年(二十三歳)

崇徳天皇は、鳥羽天皇の第一皇子、二十三歳で讓位された。

「保元の乱」に敗れ、四国讃岐に流される。金刀比羅宮を深く敬われ、四十六歳で生涯を終えられた。崇徳天皇は、幼少から和歌を愛好、在位中頻繁に歌会を催された。

中尊寺に金色堂が建立され、西行が出家し、諸国を行脚。

崇徳院

久安六年百首。詩花和歌集を藤原顕輔に命じ。千載和歌集に二十三首。

瀨を早み岩にせかるる滝川のわれても末にあはむとぞ思ふ

小倉百人一首 77

滝の水は岩にぶつかり二つに分れるけれど、また一つになる。来世では結ばれるでしょう。

崇徳院

最上川つなでひくともいな舟のしばしがほどはいかりおろさむ

山家集

西行返歌

つよくひく綱手と見せよもがみ川その稲舟のいかりをさめて

西行は崇徳の跡を尋ね讃岐に渡り、詠んだ。

松山の波に流れて来し舟のやがて空しくなりにけるかな

山家集1353

松山の波に流れきた舟(院)はむなしく朽ち果ててしまった。

松山の波の景色は変わらじを形無く君はなりましにけり

山家集1354

よしや君昔の玉の床とてもかゝらん後は何かはせん

山家集1355

崇徳院

ちりぢりに別るるけふのかなしさに涙しもこそとまらざりけれ

千載集九・哀傷歌

ここをこそ雲の上とは思ひつれ高くも月の澄みのぼるかな

続古今集・秋上

宮中を一番高い雲の上と思っていたがそれより高くに月は澄んでいるのだな

雨の三尾を巡る

夏目勝弘

京都は外国の観光客の多い所、雨ならば三尾方面は、観光客も少ないだろうと思ひ、七月二十三日雨との予報に出掛ける。

京都は大、雷注意が出ていた。駅前バス乗り場は、外国人はまだ少ない。三尾方面のバスは大学生が多い、立命館を過ぎればもう三名ほどしか残っていない。そして高雄病院で老人が降り一人となった。

雨は少し小降りになった。まず明恵上人が九歳の時叔父上覚上人を頼って高尾山神護寺で仏道修行に努めた神護寺に向うことにした。

バスを降り直ぐ下り坂カエデの枝々が触れるほどに繁り暗む羊腸の坂・雨ですべる石道を一歩づつ確実にと足元に集中していた歩みを止めたとき清滝川の瀬音が聞こえてきた。

幾曲りしてきたのだから樹下の斜面を見るとウバユリの群落がある。まだ花は咲いてはいない、槍の穂先のような蕾だ。

清滝川は雨で少し緑色となり水高が増している。朱の橋を渡った所に喫茶店があり、営業中の札が出ていたので入る。

食事はまだコーヒーのみとのことトーストならよいと、とりあえずパンとコーヒーで腹の虫をだまらせ、いよいよ急な上りの続く神護寺の坂に挑む。

山門に辿り着いた。受付の時計を見ると未だ十時にはなっていない。受付の若僧にカメラの電池の交換をお願いして、全身の汗を拭く。予定通り観光客はまだ一人も来ていない。空海も住持となったこの空間の静寂を十二分に感じることができた。

ようやく二人組の女性が山門を入ってきた。途中六人とすれ違い清滝川沿いの道に出る。

濁りの増し激流となっていた清滝川沿いの道を横尾の西明寺に向う。西明寺も一組の夫婦が朱印帳を手にてしていた。ここより最も北にある高山寺に向う。

石水院もまだ観光客はいなかった。静かなうちにと広縁にてミニ座禅でもと思ひ、心を静めていた。十分もたたないうちに話し声が聞こえた。雨も上りバス停より一番近い高山寺、少し早いが帰ることにしバス停に。

帰りのバスも一人のみ、汗と雨で重くなった上着をバスのなかで着替えスッキリし、雨の日など明恵上人は何をしていただろうと変なことを思いつく。

持ってきた「明恵上人歌集」を見てみると承元三年二十八歳の一首の詞書に

板屋も漏り、衣もとりて、雨の脚身に当れば

○あないたやただ一重なる夏衣ふせぎかねつる雨の脚かな

○稲妻のほどなきまにも書きつくるあとをとどめて形見ともせむ
この詞書には、曇る空で室が暗く筆先も見えない、稲妻の光るを待ち、後のしるしに書きつづったとある。

明恵上人歌集に多い月の歌を記しておく

○あかあかやあかあかあかあかあかあかあかあかあかあかや月

○山のはにわれも入りなむ月も入れ夜な夜なことにまた友とせむ

○くまもなく澄める心のかげやげばわが光とや月思ふらむ
静かな高雄より京都に着き、あまりの人の多さに疲れがピークになる。

駅弁とビールを買い十三時三十三分の「ひかり」に乗る。

「氷魚」のことから (176) 岡本八千代

半夏^{はんげ}すぎて、けさは初蟬の声を聞いた。新聞では、無人探査機の「冥王星」のことが盛んに載っている。こんな時、私は宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」を想い出さずにいられない。――「賢治はあの当時にどうしてあの宇宙の世界へと心が動いていったのか」と不思議に思えてならない。その不思議な空想が、今こそ現実の世界になってきたような気がする。心というものには美しく清らかでどこまでもその夢はひろがってゆくような気がする。それが人間の生存の中でひろがってゆくのだから、全く不可思議だ。

子規だつて、病みつつも、次から次へと彼の夢がひろがってゆき、健康な人以上に夢を現実化していったような気がする。今回は、うんと逆のほつて、母親から見た子規のことにふれてみたい。

子規全集・別巻二・回想の子規一を参考に、子規居士幼時について、子規母堂よりの話。

- ・子規の母の名は八重という。八重は松山藩の儒者、大原観^{かん}山の娘。父親死後、子規は大原家に庇護されて育つ。
- 母の弟の大原恒徳^{とく}が子規の後見人となり、財産などの管理にもあたっていた。
- ・子規のうぶ名は、處之助という名だった。
- ・学校へゆくようになると、トコロテン〜と言われはし

ないかと後で『升^{ノボル}』と改えた…と母堂はいわれた。体はみんなよりずっと小さくて、それに丸く肥っていた。十五六歳になつてもやはり小さかった。

・コレラの流行る頃、その病気に罹^あつたことがあつたが、食中^あり位であつた。

・どこかで転んで膝をうつて、少し切つて膿を出した事が成人してからもその痕が残っていた。

・自分の家が火事にあつて、その頃の子規は、三歳であつたので、焼けたというのを「ヤテタ」といつて笑われていた。そのころ下女がいてはるといふ名をいうのにアブと言っていたと。

・母親の父親、大原観山氏について、勉強に行かせた時、子規は朝寝坊で、みかんとかお菓子とかを握らさねば中^{なか}く早起きできなかった。

・観山さんが亡くなつてからは、家から一町くらい隔つた処の土屋先生の処へ勉強にゆき、此処で、四書五経を学んだ。

・習字も三並良^{みなな}さんの従兄の父の山ノ内といふ処へ習いにゆかせた。しかし、習字にゆくのは嫌いで、いやいやながら行つていた。成人して彼は習字はよかつた。

・親友は、五友の中で特に三並良と大田という人と、竹村さん（黄塔、碧石梧桐氏令兄）と、陸軍少佐の森さんの四人と子供の頃からの仲良しだった。――と。

母八重さんの述懐は今回はここまで。次号へ。

ことのはスケッチ (44) 今泉由利

『天田愚庵』⑧ 年譜

☆明治三十四年(一九〇一年)愚庵四十八歳

○正岡子規の『仰臥漫録』

「青厓と愚庵芭蕉と蘇鉄哉」「青厓今愚庵に逗留」と。

青厓は子規と同じく根岸に住し親交があった。

○臥床

世を棄てし我にはあれど病む時は猶父母ぞ恋しかりけり

若草の孀もあらねば門辺栖む媪我がため今朝もかしぎつ

我がために炊かば炊げさされ石よなげて炊げ、齒にさ

やるがに

☆明治三十五年(一九〇二年)愚庵四十九歳。

○九月十九日、歌友正岡子規逝く。行年三十六歳。

糸瓜で咲て痰のつまりし仏かな

愚庵詠

如何して君はますらん荒金の地さけて照る今日のあつ

さを

夏の日にあふきてたのめ深草の野辺より送る風の恵みを
吹風を衣の袖につつまかね団扇にこめて送るはかりそ

○中秋、竹生島に月を賞す。

○桜井一久に誘われ西下、広島、高浜を経て三十一日、

道後温泉に渡り、茶金旅館に着。

☆明治三十六年(一九〇三年)愚庵五十歳。

○東京大相撲の黄金時代。梅ヶ谷と常陸山が東西の大関

と対立。

○愚庵は京都から上京し、陸羯南宅に宿り、十日間連続回

向院に通い陸羯南手配の棧敷席より大相撲を観賞した。

○(呼び出し奴が呼びだすところ)

東は梅ヶ谷かよ西は誰ぞ常陸山とぞ名乗あげたる

○(土俵にのぼるところ)

大山はゆるぎ出たり西東関の大関ゆるぎいでたる

○(「古事記」の天照大神が須佐之男命の暴挙に備えた
ところ)

堅庭を泡雪の如向股に蹴はららかす雄猛のよさ

○（仕切るところ）

潔いさぎよくしきれまよ牡夫立まらおつ時に待てとはいふなまちはするとも

○（観客の熱狂）

梅とよび常陸とさけび百千人ももちびと声をかぎりなきほひとよもす

天地も今や砕けむ増荒雄ますらおがいかづちのこときほひすまへば

○（「古事記」に日か日かな並べて、夜には九夜日こよには十日）

大相撲日このかには九日見こてはあれど常陸山には勝つものなし

○（漢熟語をそのまま歌に）

虎とうち竜とをどりて壮士がすまふを見れば汗握るなり

○（事実）

此相撲このただ一つがひ見むためと西の都ゆはるばるに来つ

○（大相撲であったこと）

突つく手さす手見る目もあやに分かねども組みてはほぐれほぐれてはくみ

○（常陸山の勝、強さを替える）

東の関もなげたり常陸山天が下にはただひとりなり

○十一月、兄真武夫人同伴で来訪。洛中諸勝を誘引。

○十二月、法弟元策を相続人と定め、地所建物は藤原忠

一郎に譲るなど資産配分を準備する。中川小十郎に遺産処分さんぶんの決定を告ぐ。

○落合直文逝く。行年四十一歳。

○ライト兄弟初飛行。

○発卵感懐（父母生別三十六年）

ちちのみの父に似たりと人がいひし我眉の毛も白く成りにき

かぞふれば我も老いたり母そはの母の年より四年よとせも老いたり

○静かな悟りのうちに

うたかたの泡と此世を知ればこそいやこひまされ亡人のあと

経もあり仏もあれば我もありこころのおくに亡人もあり

○沙羅双樹花開

生れては死ぬ理ことわりを示すちふ沙羅の木の花美しきかも
美しき沙羅の木の花朝咲きてその夕には散りにけるかも

朝咲きて夕には散る沙羅の木の花の盛りを見れば悲しも

○一莖九花蘭

此蘭の花は春咲く咲く花は一本毎にここの花咲く

編集室だより【二〇一五年 七月】

三河アララギ賞 杉浦恵美子様

これ以上簡素な暮しもあるまいぞ日がな一日刺繍と読書

一ヶ月を通じての心の移ろいが、独特のリズムを共なって連作となる。新しい個性を楽しませていただいています。

○筋肉トレーニングをしている。ジムにゆきつく十五分間の道のりです。

石神井川に掛かる「音無橋」を渡り、そこから飛鳥山に登る。享保年間、徳川吉宗公の植えて下さった1270本の桜のつなぎ、その桜の季節くくの移ろいを眺めながら、日本経済の基礎をなされた洪沢英一郎に差しかかると本郷通りに降りる。ジムに着く。

○入谷朝顔市。入谷鬼子母神を中にして、言問通りに1000軒の朝顔露店が並ぶ。66年目になるという。

朝顔はヒルガオ科の一年草。葉は左巻。原産は熱帯アジア、西南中国からヒマラヤにかけての暖かい山麓。千五百年以上前、奈良時代に、中国の遣唐使よりもたらされた。薬として入ってきたのが江戸時代に、鑑賞用になった。ほとんど品種改良が進み、行く度に、様子が変わってるのが、なんだか寂しい。

○浅草・染太郎

昭和13年創業の「お好み焼染太郎」へ。何もかも昭和のまま。高校生らしいグループ、外国の人達多数。畳みに座るスタイルに苦勞している私に関係なく、皆楽しそうだ。食材の本質の味が味わえる美しいお好み焼。ビールと一緒にあれこれ、素敵です。デザートには、あんこ巻。

○上野精養軒。夏の間、屋上でビアガーデンが開かれる。父の学生時代、母が加わっての東京生活を偲びたく出掛けた。上野の森の深く広い緑に包まれる不忍池を眼下にするオープンテラス。蓮の葉が池を埋め尽し、花も咲きはじめている様子の夜の池。明治5年創業の歴史は、すっぱり父母を思わせて下さった。精養軒の味は母の味。

○柳橋・笑月庵、享保十八年、水神の霊を慰めする「両国川開き」。隅田川に架かる橋を、レインボーブリッジから白鬚橋まで：せつせと描かせていただいたお礼の気持で毎年この川開きに参加させていただいている。川風に吹かれて、ビールが美味しい。

○パソコンクラス、暑氣払い。突然王子に住みはじめ、前後左右知人の無きままを長く続けた。ある日、地元のパソコンクラスに混っていた。駒込、本郷通り側を巢鴨に向って：線路際に染井吉野の古木並木：そこにあったレストラソにいて。

○いつもそうなのだけれど、7月もまた飲んでばかりいた。お酒が少しあることで、すべてのことの余韻が大きくなる。

和菓子街道（107）

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

姫街道(3)

暴れ天龍と呼ばれた川は、現在では橋より他に渡る方法はない。しかし、数年前までの天龍川橋ときたら、交通量が多く歩道もなかったため、現代における街道歩きの難所中の難所であった。近年ようやく歩道ができて、安心して渡れるようになったのは喜ばしい限りだ。

難所の汚名(?)を返上した天龍川橋から安間までは、東海道を行くことになる。安間で東海道から離れて北上する姫街道は、車一台がやっと通れるかどうか、といった狭い路地だ。

沿道には時折、忘れ去られたようにぽつんと道標を見つけることができる。特に私の目を引いたのは、「半蔵坊」と書かれた道標だ。半僧坊とは、これから目指す浜名湖北岸の深山に伽藍を結ぶ方廣寺の鎮守・半僧坊大権現のこと。子供の頃よく耳にした「奥山半僧坊」だ。



市野宿に向かう途中で見つけた半蔵坊の道標。

ここでも、古い記憶が蘇る。なんだか自分の記憶旅をしているような気分になりながら、姫街道中最初の宿場町・市野に足を踏み入れた。

お知らせ

▽十月号の原稿は、九月一日(火)までに、必着、郵送のこと。

▽原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。

郵便の休配(日曜、祝日)を考え、早目の送付をお守り下さい。

▽原稿の返却を希望される方は、返却用封筒に切手をはり、原稿に同封して下さい。

▽原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、楷書で正しくお書き下さい。

▽原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一一四一〇〇二二 今泉由利

編集三河便り

△三河アララギ創立地、三河に「編集三河」がありました、不都合が多くなり、全ての事務を、東京編集室で行うことになりました。

▽会員の皆様には、何の変化もなく、今までどおりです。

▽三河小坂井の生れ、土屋あい子様、皆様の原稿用紙での原稿を、パソコンに打ち込みして下さいます。それを印刷所に渡し、三河アララギ誌となります。

▽土屋さんは幼時、身体が弱く病気がちだったそうです。彼女の家へ、東京の医科大学を終え、故郷に戻ったばかりの頃の今泉忠男(御津磯夫)は、「きれいな看護婦さん連れ、往診に通って下さった」との土屋さんの思い出。「それは父です」と私。そんな奇縁があったのでした。

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。

◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができます。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半々年分一万円、一カ年分二万円の割で前納された。ただし、購読会員は、半々年分二千元、一カ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様たたちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができます。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十七年八月二十五日印刷 第六十二巻 第九号
平成二十七年九月一日発行 定価 六 百 円

編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目 勝弘
平松 裕子・山口 千恵子・森岡 陽子

発行人

今泉 由利

発行所

三河アララギ会

三河アララギ発行所 〒一一四一〇〇三二
東京都北区王子本町一の二六の六A
TEL (〇三)五九二四一〇六五
振替口座 〇〇八三〇一六一五六三九
E-mail yur188@cronos.ocn.ne.jp
Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

印刷所

株式会社 桜 創 美